

滞在型市民農園における利用者と地元住民の交流－北海道 A 農園の事例－ Interaction Between Users and Local Residents In A Stay-type Allotment Garden

○藤崎 浩幸* 佐藤 匠*

○FUJISAKI Hiroyuki* SATO Takumi*

1 はじめに

滞在型市民農園は都市部遠隔地に立地し、農山漁村地域での滞在を通じて、田舎暮らしを楽しむ場とされており¹⁾、契約した区画内に休憩・宿泊可能な小屋を併設した農園を都市住民が利用する施設である。1990 年代以降全国約 70 箇所で開催されている。これに関して、古屋・牧山は東京から 100km に位置する茨城県笠間クラインガルテンを対象に、地元住民と利用者との交流イベントを通じ、利用年数が長期になるにつれて交流段階が進展すること、滞在型市民農園までの移動時間が長いほど交流が深くなる傾向があること等を明らかにしている²⁾。

本研究では、首都圏から遠い北海道に立地し、栽培指導を行う地元住民ボランティア組織が存在している A 滞在型市民農園を対象に、利用者とボランティア会員の交流実態を把握することを目的とした。

2 調査方法

農園運営者より概要について聞き取り調査を行った後、2020 年 12 月に 2020 年度農園利用者 18 人とボランティア会員 16 人全員を対象として、無記名アンケートを配布回収とも郵送で行った。有効回答は利用者 17 人(94.4%)、田舎の親戚 11 人(68.8%)だった。調査項目は、交流状況と回答者属性で、利用者には利用状況も調査した。

3 農園利用者の状況

利用者の年齢層は 60 代 5 人(30%)、70 代 12 人(70%)で、現在の職業は 17 人中 9 人(53%)の方が無職であった。農園への同行者は配偶者 9 人(53%)、本人のみ 7 人(41.2%)、友人 1 人(6%)で、子連れの利用がなかった。居住地は札幌市が 6 人(35%)で、残りの 11 人(65%)は、関東以西(最遠は香川県、岡山県)だった。札幌(道内)からの利用者は自家用車で来園するのがほとんどで、道外利用者のほとんどは、自家用車とフェリーを使い最短 23 時間、最長では 55 時間かけて来園していた。道内利用者は、週 2 回や月に 10 回などという来園頻度なのに対して、道外利用者全員が、5 月に一度来園すると、冬の閉園時期となる 10～11 月頃まで半年間ずっと滞在していた。

農園滞在中の過ごし方を「農園管理」「小屋での余暇」「地域内への訪問」「地域外への訪問」に 4 区分して回答してもらったところ、道内利用者の平均値は、農園管理 55%、小屋での余暇 25%、地域内訪問 5%、地域外訪問 15%と農園管理の比率が高かった。一方の道外利用者は農園管理 35%、小屋での余暇 28%、地域内訪問 14%、地域外訪問 23%で、地域外や地域内訪問にも多く時間を費やしている。

4 ボランティア会員の状況

ボランティア会員の年齢層は、50 代 1 人(9%)、60 代 5 人(45.5%)、70 代 5 人(45.5%)だった。農業従事状況は、「経営主の専従者」が 2 人(18.2%)、「経営主ではない専従者」が 6 人(54.5%)、「補助者」が 1 人(9.1%)、「職業として農業に携わっていない」が 2 人

*弘前大学農学生命科学部 Faculty of Agriculture and Life Science, Hirosaki University

【キーワード】滞在型市民農園／都市農村交流／地域住民

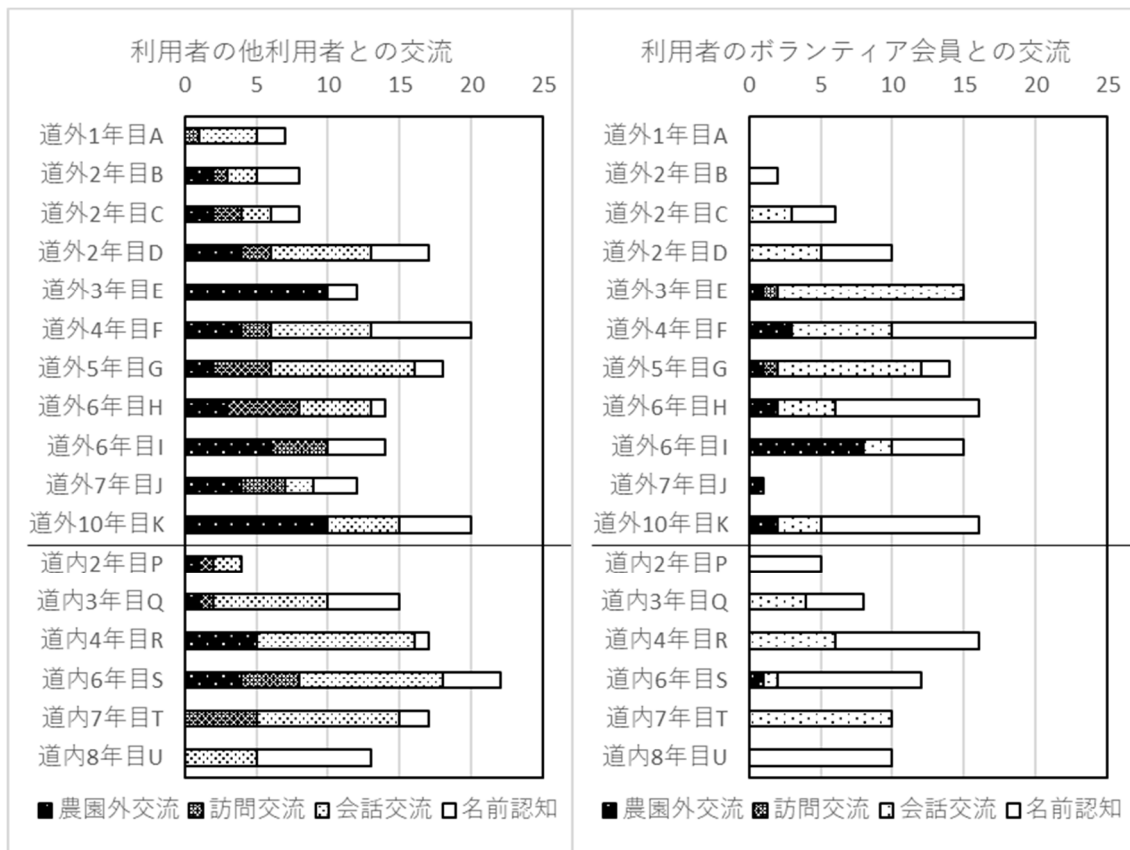


図 1 滞在型市民農園利用者ごとの交流人数
 Fig. 1 Interaction of Each User of Stay-type Allotment Garden

(18.2%)だった。町外居住経験は「ない」4人(36.4%)、「ある」7人(63.6%)である。地域での活動歴に対して、5種以上が2人(18.2%)、3~4種が3人(27.3%)、1~2種が5人(45.5%)と地域活動経験が多い。また、回答があったボランティア会員のうち1人は元農園利用者が移住した人だった。

5 利用者、ボランティア会員の交流

利用者、ボランティア会員の交流については、交流の深さを農園外で会ったり音信がある「農園外交流」、農園内の小屋(ボランティア会員の自宅)を訪問することがある「訪問交流」、農園内で会った際に日常会話をする「会話交流」、名前を認識している「名前認知」の4段階設定し、利用者とボランティア会員それぞれについて、該当する人が何人存在しているか回答してもらった。図1は、利用者が回答した他利用者(左)とボランティア会員(右)の交流人数で、道外利用者と道内利用者に区分し利用年数が短い順に並べた。

全体に利用年数が長い利用者の方が、交流人数が多く農園外交流まで到達している人数も多いものの個人差も大きい。また、ボランティア会員よりは他利用者との方が交流が深く人数が多い傾向がある。

ボランティア会員では会員年数と交流人数との傾向が見られなかった。16年目の1会員を除くと、会員年数が長いからといって農園外交流人数が増すこともなく、会員3~5年目の会員でも名前認知まで含めると利用者との交流人数は約15人に到達している。

引用文献 1) (一財)都市農山漁村交流活性化機構(参照 2021.2.19): 滞在型市民農園, https://www.kouryu.or.jp/service/kg_taizai.html 2) 古屋, 牧山(2004): 滞在型市民農園利用者の意識と行動および地域活性化の寄与の可能性, 農村計画学会誌 23・論文特集, 205-210